



日五廿月六年十正大 號十四百第 日五廿月六年十四治明

花の木に就て

西澤生

本樹は先頃在學生安江明耕君郷里岐阜卓縣より取寄せ學校に寄附せられしを以て、之れを校舎の中庭に植付け、幸ひに活着したので誠に珍らしき樹と思はる、により同君の之れに對する説明を基として聊か本樹の特性につきて、述べれば次の如し

さて本樹は樺樹科に屬する樹木で「花かへで」とも稱へ、又岐阜縣下に於ては俗に「目洗の木」と稱へらる、即ち此の樹の皮が目薬に用ひて効があると云ふことである。中には高さ五六丈に達する大木もありて雌雄異株にして稍々灰白色を帯ぶ。芽を覆ふ鱗片は革質にして長さ一寸乃至三寸、幅一寸乃至二寸、形は卵圆形或は卵狀圆形をなし先端鈍内面に毛あり。葉は薄く裏面白色にして三乃至五脈を有し、三裂或は不規則に破裂し底部は圓形或は心臟形にして先端少しく伸ぶれども鋭からず縁邊に不規則なる鋸鋸齒を有す花は春季葉に先き立ちて開き赤色にして小枝を攢簇す花柄は平滑糸狀なり、萼片は披針形にして鈍頭花弁は鐘形鈍頭と殆んど同長花弁 共に五片なり、雄蕊は八本、葯は長橢圓形にして赤色を帯ぶ。花盤は不完全なり柱は深く二裂す。

我國にありては、其の産地余り多く知られず目下世に知られたる所は滋賀縣惠知郡三重縣桑名郡長野野縣西筑摩郡岐阜縣可兒惠那加茂の三郡に自生せりと云ふ。而かして

本樹に關する歴史的事實は、漠として知られざるも大古世界が泥海に化したる時僅に生物としては此の「花の木」とイデフとのみ殘存し其の後イデフは珍木として庭園垣根等に賞用せられて今日の如き多數の樹木を致せど花の木は其の存在と由來等を世人に認められず、遂に今日に至りしならんと思像せらる。然るに斯くの如き天然保存の必要あるにも拘らず、その所以を知る由なれば、濫伐して薪炭の用に供し、所謂伐採と自然淘汰の結果右四縣下に幸じて殘存し今尚岐阜縣加茂郡東白川村には、偶々左記の如き大木現存し、岐阜縣廳よりの天然保存を命ぜられたりと云ふことである。

周圍一尺四寸長さ九間 壹本
 周圍二尺六分長さ十間 壹本
 周圍二尺六寸五分長さ十二間 壹本
 周圍三尺六寸長さ十二間 壹本
 周圍五尺以上長さ不明 貳本
 其他最寄りの山林中にも所々に自生せる老幼木あるも別にこの樹はこれとしての利用の途はなく只珍木として賞用せらるのみにして、數年前に珍木として東宮御所へ植へられしと漏れ承る。

生存地は非常なる日向きの乾燥地よりも北面若くは東北面の山腹凹地にして、地表には落葉苔類の堆積し、且つ常に水分に富める處に好んで天生せらる、を見る。而かして本樹の天生せる處より見るも極めて小部分に過ぎざるを以て天然御保存上之れが

保護の必要あるものと信せらる。(完)

森林と昆虫 (つづき)

菊池 一

前に述べしプランコ毛虫は本年は四月廿一日頃に孵化せり、昨年より一週間餘り遅れたるべし、去年盛に採りては殺せし故本年は少なし六月九日には五六分に生長せるものもある引き續き観察すべし

海軍用木材

匹共々に針葉を圍みて前後より食ひつ、あり、従つて福島地方に於ける該虫の發生は五月上旬と思ひてかならん、次で五月十五日には興禪寺前にて同二十二日には上松より機までの路傍にて數ヶ所より多數採集之を瓶中に飼育せるものは六月一日に蛹化を始めた、六月五日に宮越の徳音寺に曲る橋の近くの松に群棲せるを見れば我が木會には可なり多數繁殖し居るなるべく該虫もプランコ毛虫に劣らず貪食なれば被害も決して少なからざるべし

らる現時の如く技術進歩する時代に於て最新式の軍艦にさへ尙純日本の通船若干隻を裝置し居り一見奇怪の感なき能はざるも之は輕快にして操縦簡易に日本人古來の習慣よりして最も適當せるが故なり其他軍港官に使用する 雜役船の數は可なり多數に達し是等の新造修理には凡て杉、扁柏、松、樺、荷以上の外に鹽地、檜、樟、榎、山毛櫸、朴、蝦夷松、檜松等も使用せらる

必要なく長短種々あるを却て便利とするべく多し丸太は目通三寸五分乃至七寸のものにして艦船建造中足場用支柱として多數を要す

扁柏 其用途を擧ぐれば甲板材甲鐵背材を外にしても軍艦の橋及「ヤード」の類艦載水雷艇汽艇及一般端艇の外甲板類木製の兵器附屬品鑄物用木型其他艦内裝品殊に風紀衛生上兵員が砂磨きをなして清潔を期する物品等の製作に供せらる殊に緻密を要する兵器に對し型の狂ひ起らざる点より鑄物用木型として最も重用せらる、材料なり

吳工廠にて購入の扁柏材は長田材曲材及普通用材の三種とす長圓材は艦船の「マスト」「ヤード」に使用するものにして眞直長大なるものを必要とするものなるが本來米國松を使用し來りしも近來材料自給主義の下に扁柏を以て代用せんとする傾向に在るものなり大さは末口徑八寸、伸長四十尺乃至五十尺又末口徑一尺乃至一尺二寸、伸長五十尺乃至六十尺のものを要す凡て軍艦の「マスト」は無線電信を始め信號觀測等極めて重要な戰術任務を帯ぶるものなる故其材料は又慎重の選擇を要す

曲圓材は汽舟端舟類の外板に使用す長さ二十尺以上徑一尺二寸以上の無筋のものを要し曲りは必ず一方曲り全長に就き五寸乃至一尺を適當とす且可成元木たるを望むものなり普通圓材は鑄物用木型兵器附屬品其他の製作に使用するものにして長さ徑には

制限なきも長さ十四尺以上徑一尺四寸以上の無節のものを最も便宜とす 有名なる木會扁柏は木理特に緻密にして色澤芳香共に他に其比を見ざる優品なるも材質少しく軟に過ぎ且價額不廉なるにより海軍にて軍用材として使用すること極めて稀なり飛彈産のものも同様の理由によりて普通使用するこなし軍艦の「マスト」「ヤード」の類は木會扁柏よりは堅實にして纖維通直なる高野山産のものを使用す然し之れには粘靱性變曲性に就きて多少の欠点なき能はず (山林彙報臨時増刊未完)

創造の翁

夢路生

純白の衣を纏ふ白髮の彫刻師が、鑿を握つて彫像の前に立ち更に力ある一刀を創作の上に加へんとする。彼は常により偉大なるスピリットに接して、より偉大なる傑作を刻み上げんとするのである。彼が畢生の力を込めて刻み上げた彫像が幸にして傑作である場合には、喜びと、満足と、より偉大なる希望とを覺ゆるが、反對に彫像の悉くが醜惡なる場合には、彼は悶々、苦しみを遂に彫像の鐵鎚を下して、遺憾なくそれを打ち砕くを常とする。而して更に新しき傑作へと努力するなり。

天地の間に作り出されたる人間と云ふ大なる彫像は、神に似て作り成されたりと云ふも、此の麗はしかるべき作物に幾多の汚點が見出されて、創造の翁は今悶悶して居る。

初夏來る

ほと、ぎす

今や彼の偉大なる彫刻家は、涙を絞つて、萬人を醒よし虚偽の假面を引き剥き、沈輪より自を救へしと叫んで居る、若人の涙もそれである、國士の涙もそれである。天才も豫言者も愛の涙に照ひて可憐なる剛像の大に大なる鐵鎚を下さんとする。是眞に可愛ければこそ打つ親心。

口だ云ふもあらうが、斯る徒輩は何れも意氣地なしの骨頂か人の風土に置けぬ弱者である。

修養に志すもの、鍛錬せんと心懸くる者、向上に工夫する者は、人の見て以て難しとする處に往き、世の以て苦痛とする事に當り、他を以て避けんとする物を迎ふるは古今其共通の事蹟である。故に冬と夏とを以て尤も好む時なりとし、歓迎せねばならぬ季節なりとす。

夏は来た。暑い時は来た。蓋し暑い時となつた。面白いではないか。有難いではないか。平素の修養が自覺される。鍛錬が試められる。向上の意味が吟味される。と思ふ時、又之から真劍の修養、鍛錬向上が出来ると考ふる時、我等は勇氣の百倍するを覺ゆ。邁進の努力をせんとする瞬がきまる様に覺えらるるう。ではないか吾が校友諸君夫れ如何ぞや

明けゆく道(つづき) しげる生

おしま次第にうつむいて行く
暫らくしてから山田の手を握りしめてちつと親指のよとの邊りを見つめて居たがどうも泣き出すさうして泣きながら

おしま まだ残つて居るわね。入墨のあとが、わたしもこれの通り残つて居るの、わたしこれを見るたんびに何時も泣いて居るのよ。本當にあの頃は楽しかつたわね。うらあんの玉さんと三ちや

山田 全くあの頃騒いだなあ。おしま、わたしが入墨をやらうといひ出すとあなた「うんやるぞ」とどなつたわね。すると玉さんたちもやつぱりまげん氣になつてやり出したらなんぞしてね。

山田 さういやああの晩は随時酔つて居たなあ。
おしま は、(淋しく笑つて) 正宗のお冷をラッパ飲みなんかしてね。(おしまかくして居たウヰスキーを取り出して) こうれ、こんなにしてね。

山田 何んだ。ウヰスキーぢやないか。暗い顔になりながら。
おしま いららうだ。うんな強い奴は第一これでは病氣がよくなる筈がないぢやないか。

おしま すみません。だけんどね。許してちやうだい。わたし此頃かうしてお酒ばつかりいただいて居るの。お酒がわたしのたつた一人のお友達よ。お酒がなかつたら一日だつて生きて行けぬし。

山田 亂暴な、お前はそその亂暴な氣性で一生をぶちこはすのだ。
おしま どうせ死ぬんだつたら早く死んだ方がい、と思ひますわ

山田 死んで何になる

おしま 生きて居て何になる。(ちよつと考へてから) 實際考へてみりや今頃わたしはあなたに顔出など出来た義理ではないのね。(また考へる) あなたわたしを呪つてやしなくつて?

山田 呪つたつてしかたがないぢやないか。もうみんなすんでしまつたことだから
おしま どう考へて居てくれるのわたしがおしまへ来た事をさ。

山田 お互に弱かつたと思ふだけさ。おしま さうだ弱かつた。わたしこんなことにならうとは夢にだつて思つてやあ居なかつたの(間)

うちの人が三度呼んでくれた後であの廣田屋のはなれでさ。わたしをうけ出すといひ出したんでせう。さうしてこういふでせう「てめへがうんといやあよじさもなかつたら命がないと思へ。次の間へはなちやんと乾分の野郎共を連れて来て居るから逃げやうたつて逃がすものか」どさ。わたしはもうこわくつて、夢中になつて泣いてるうちに店の借金をかたづけしてまつて「もうこれで、てめへは藝者ではおれおれの可愛い、奴ださあ出かけるんだ」とこう言ふんでせう(ふるふる身振しながら) 本當にわたしは弱かつた。あの時に死んでさへ居たら今頃こんなつらい目に會はされなくつても

すんだのに(間)あ、あの頃のことを思ふとぞつとする

山田 うんなわけがあつたのか。俺はお前がこちらへ来たといふことをきいてからそれだけ苦んだかしのれないよ。お前の心持がわからなかつたものだからなあ

おしま すまなかつたね——どう許してちやうだい
山田 してこちらへ来てからはどうだおしま とてもお話にならないの(戸口の方を氣にしながら聲をおとして)

うちの人はおれでせう。こちらへくるどちぎにまけてねお金の工面がつかないところからわたしの道具や着物に手をかけてしまつたの。さうして今ではわたしのまはりのものはしつかり賣りどばしてしまつたの

山田 ひどいことするものだなあ
おしま あなた知つて居るんでせうこのはなんてんをね(自分のはんでんを指しながら) これあの西山に居たころ着て居たのね、今では私の財産はこれ一枚つさりよ。

山田 よくあれでこの冬がこせたなあ可愛さうに
おしま 着物やらんなものはがまんが出来ますけど毎日責められるにはまつたくおろろしくてしかたがないの。ふつたりけつたりするのは朝飯前なんぞすも

のね。此の頃も外に男があるといひ出してねわたしを二階からけおとしたのわたし本當に癪にさわつてしかたがなかつたから泣きさしやべりにしやべつてやつたの。いつそのことを私を殺してちやうだい)つて 所がにくらしいぢやないの(金で買ったものをむやみに殺してなるものか)つてねわたしその夜は何故死なかつたと思つて一晩泣き明かしたの。(續)

大正十年度第一回 辯論大會記事

花は散り逝げども新樹の翠色は滴るとも見え魚戯れて綠影を動かすの秋熟血溢る、我が二百の健兒の爲め本月三日をトし第一回懸賞辯論會は講堂に於て開催された壇上に躍り出た各辯士の叫びは吾々の士氣をこして一層振興するの聲であつた

次に當辯士の概評を試むれば次の如し
開會の辭 部長 山田憲夫君
◎依頼 二年 山内 勝君
風は順風によりて空高く舞へども一度逆風來らば遂に落下するに至ると説き出し
た君は元氣充滿大樹の倒る、が如き大聲は満場に響き渡つた

◎戦の人生 一年 井出 進君
トルストイ、フートープリヒの努めより論起して弱者即ち敗者なり實力なくして何ぞ人生の戦場に於て勝者たるを得んやと

説きたる其の老練さは賞すべし希はくば今少しの聲量と抑揚とが欲しい
◎思ひのまゝを 一年 小野久孝君
東北訛りの沈着なる口調を以て何事にも誠實なるべしと説く
◎眞の成功 二年 田中文正君
少し赤らんだ顔に區切よき言を以て成功は結果のみにて論ずべからだ眞の成功は努力に努力を重ねて來ると説きし君は初陣の功名を得た

◎自助 二年 古畑 豊君
例をフランクリン豊太閣に取り他よりの受力は弱し自助は強しと論ず態度甚だよし今一段の聲量と抑揚があつたなら一層光が出ただらう

◎歡樂 二年 阿部達三郎君
金言玉章進出せる如きも惜むらくは低聲にして論意不徹底の感ありし之初陣の故なりしにや
◎自己の奉仕 一年 今井 一君
社會奉仕有意義生活は自己の奉仕にありとの叫びは聴衆をして感動せしむる事が多かつた君の語尾上りて氣持よき言葉と其の態度とに強いて求むれば今少し悠然たる所があつたならと思はれた

◎道德側面觀 二年 多田駒三君
君が過去二拾年の告白として道德の餘りに窮屈に見られたれど事實然らざるを論じた態度も可言語も相當滑かなるに熱の少きは遺憾であつた

○青き木蔭に 三年 片田敏郎君
 自然の嘆美者湖畔詩人の名あるウオズワ
 ーの詩「吾等七人」の概意より説き起し
 たる君の流る、が如き能辯は熱して物質
 文明陶酔者輩をして覺醒せしむる曉鐘の
 一打であつた形容も可能度も良希ばくば
 今少し悠然たる口調が欲しかつた大に自
 重されたし

○嗚呼今年 三年 清水 恒君
 神武帝即位の年は即ち辛酉の年にして今
 年も又辛酉なり吾人大いに改造せざるべ
 からずと論ず

○叫び 三年 山田憲夫君
 現今列國の關係米國の三A英國の三C獨
 國の三B政策に付き我々青年の使命の重
 且大なるを論じ實力養成を叫ぶ特に力あ
 る言語態度は聽者をして知らず知らず拳
 を握らしめた時に流瀆の氣味なきにしも
 非ざれ共流石は我が辯論部の花形だ

○飛入 荒木 先生
 會て奈良井驛にて或る昆虫の瀟車を止め
 たる事實より森林保護學の必要を説かる
 時々椅子に列する聽者を振り向きて笑ま
 る、も又一興

○獄屋 菊池 先生
 數年前監獄を訪れし時鐵窓裡に伸吟する
 幾多罪人の有様を事細かに物語られ人生
 のサムシングに達觀したと述べらる、や
 一段語を高めて彼等囚人と俗人との差何
 處にかある誘惑に弱き吾人は儚かに自己

を省みて發奮之勉むべしと論ぜられし得
 意の快辯は今日の光彩を一入増した
 ○諸君の使命 中村 先生
 時は今を去る事二千五百年前パピロン國
 王ネブカトンの夢物語より論を起て世界
 統一は我民族の使命なれば吾人の益奮闘
 すべきを説きて壇を下らる先生の周密な
 る能辯には我々は自覺せずには置けなかつた

○閉會の辭
 次の四名に對し賞としてメダルを授與せら
 る、事となつた

一年 今井 一君
 一年 井出 進君
 三年 山田憲夫君
 三年 片田敏郎君
 三年 兎 子 生
 因に評者の批評は赤顔子をわずらはし
 たり

關西旅行の記 兎子生

第一日 福島停車場午前四時七分集合未だ
 明けやらぬ冷たい朝霧の中を見送の友の萬
 歳の聲に送られた約百名の健兒をのせた瀟
 車は山の間をくねりくねつて空廣き方へ方
 へ走つた野尻驛に着いた頃はもう夜は全く
 明けて淡霧は山の頂を包んで居た左側に川
 一つ隔て、鬱蒼なる賤母御料林を眺むる事
 が出来た森林は檜椈の老齡林らしく中に潤

葉樹の點綴して居るのも又格別な眺めだつ
 た名古屋迄は大して林業上見る物はなかつ
 た名古屋にて乗り換へた瀟車は天照大神の
 在す伊勢へむかつて走つた富田濱四日市附
 近にて眺めた海岸防風林はそぞろ海風の強
 さを思はしめた又龜山より山田に至る沿道
 の松林中には枝打ちの行はれて居たものも
 あつた其の年齢は三十四年生程に見受けら
 れた山田にて瀟車をすてた吾々は内外兩宮
 へ參拜した其の道兩側には數千年も経たか
 と思はる、老杉樟等の枝森々として天を蔽
 ふと云ふ有様子の神々しさは五千有余年の
 昔に在るが如き威を起さしめたそれより古
 代の器具風俗を徵せる徵古館農林業の標本
 等陳列せる農業館を見終にぎんざりの波
 打ちよする海邊の山本旅館に足を止めた第
 二日覺めやらぬ眼をこす乍ら起きいで、海
 邊に立てば曙光は東天一帶を紅に染めて居
 た二見浦に日の出を拜まんとする人は押し
 ませ、實に立錐の余地もないとでもいひ
 たい位だつた暫て真赤な大きな太陽が昇つ
 た彼處にも此迄にも此處にも手を打つ音が
 やかまじい位午前七時此の地を後に今日の
 樂しみを持った吾々は奈良の都へと向つた
 昨夜の睡眠不足が旅のつかれかたがたり、
 瀟車の音もさながら子守歌かの様に車中
 では眠つてしまつた夢より覺めたのは午後
 二時頃もう奈良へ着いた流石は昔歌はれた
 奈良の都名所舊蹟の見るべき物が多かつた
 あらゆる物は探つたが殊に印象を止めたの

はあの若草山漫頭に青い毛布を覆つた様な
 形の頂上に走り上つた時の爽快な事はある
 だけの聲を出して歌つて見たくなつた麓に
 人なれた鹿の通る人に頭を垂れて食を乞ふ
 など奈良を外にしては見られなれと思つた
 又公園の優雅な趣は實に吾々をして足のつ
 かれを思はせなかつた向ナギの純林も見た
 其の面積五十町歩もあるとの話をしてシロ
 モジの實に似た此の實より取る油は燈籠の
 油煙と共に有名なる奈良墨の製造に用ひら
 る、事なき聞いた只残念だつたのは其の材
 に何に利用さる、かを知る事が出来なかつ
 た事だ奥の院前に寄木(七種の木)と云ふ樹
 があつた根は一つで地上は梅楓藤南天陸英
 の七種なる事が表札に書いてあつたが之は
 人工によつて作られた物だろうと思つた夜
 の暮は蒼然とあたりを包む頃散歩がてら公
 園を廻つて町へ出たとある町角で喧嘩して
 居た此の冷淡な奈良の人間が餘りの流暢喧
 嘩には驚いた(續く)

われらがたびち T 生

木曾の天地にも漸く春は來ました、吾等の
 かねてより待ちに待ちたる關東方面の修學
 旅行の日は來た鶴鳴の未だ時を報せざるよ
 りあの暖い床をはね起き直ちに仕度にか、
 つた昨晚より充分準備はしたるにまだ、
 澤山の仕度する事があつた、直ちに吾等は
 ステーションに歩をむけた、驛にて約三十

分程待ち合せ五十有余名は午前四時三十六
 分の下り列車に身を投じた、吾々は車窓に
 よりて曉の明るくなるのを待つた、暫時に
 して夜は明けた。この狹隘なる木曾谷を通
 ふ瀟車に満員の盛況を呈して約一時間ばか
 り車内に立つめには少々困まつた
 世に名だ、る木曾の美林はいつしか離れて
 名古屋の隣なる千種に着した。そこで吾等
 一行は下車し約一里の道を徒歩にて名古屋
 についた此處へ來て見ると天下唯一の山林
 學校とて悠々として活歩する事は難かつた
 名古屋にて二十分ばかりにして又もや車中
 にもたれた。今度は木曾谷を通つて居る瀟
 車と比較したなら迎も比較にはならない。
 矢よりも早き瀟車は濃尾の平野を走る、間
 もなく二三のステーションを過ぎたかと思
 ふと最早「オカザキ、オカザキ」聲は
 耳に入つたが否や吾等が頭腦には徳川家康
 公の出世地たる事が浮んだ、十五師團司令
 部のある豊橋を経ると今度は吾校と全國で
 頭を争ひつ、ある安城農林學校を左に見渡
 す限り皆水田の真中を吾がトレンが進行
 するのはまわ吾等が都にては想像し難き事
 なりしかするうちにはや静岡縣にと足は入
 り天下の絶景たる濱名湖上を通過するの快
 何に例へようかありませう、次は濱松市濱
 松といへば唯も知つて居る静岡縣第二の都
 會にて漆器、山葉オルガンの産地にして人
 口約五万ばかりとかいふ、次のステーション
 は天龍川、天龍川といへば御承知の有名

な河にて濁流を押し下して遠州灣に注ぐ約
 三十分にして中泉に着す少しにて此の前校
 長先生が修身の時御話してくれられた中泉農
 學校がかすかに見える、これから約二時間
 は格別見るものもなく只狹隘なる木曾谷か
 ら出てくるご如何にも、が大きくなつて心
 が晴々した様な氣がし又言葉のおおかいし
 いがないと、今一つはかかるさんが、消れた
 のである。暫時にして静岡に着した、着す
 とすぐに「静岡名産お茶、御茶」の聲がす
 る、少し市を離れると林の如き製紙の煙突
 の中より出づる黒煙はさながら黒雲の如し
 右には松林一里余もある三保の松原迎も筆
 舌の及ぶ所ではない。線路の兩側には穂の
 當に出でんとする處一面にどりかこみりの
 中に点々と梨桃の作れるあり、蒲原トネ
 ルを通過するや、一帯砂濱翠松を見て居る
 うちに沼津に着した、沼津で十五分停車し
 て居るうちに又瀟車が來たそれは吾等より
 後から來りて先に出發した、實にうらやま
 しかつた、日はなや西に傾いて來た、國府
 津の邊からは碧空に聳へた富士を見たの
 も實によかつた。
 吾々は藤澤より瀟車をすて電車にて江の島
 にむかつた、電車より下りてより十餘町も
 ある橋を渡りて坂道を辿り漸くにして金龜
 樓に着した。翌朝は紀念寫眞を海岸にてと
 つた、それから一老人に案内され龍屈に入
 った。龍屈の前にローソクを買つて居るお
 小僧の顔色も藪蔭の草木の如し。之より

鎌倉の五山及び名所舊跡を訪れた、あの北條の墓の半分砕けて居るところを見ることはどうして彼を思ひ出さぬ事は出来なかつた之より大船驛に至り四時の汽車に身を投じて本郡屈指の開港場たる横濱、品川等を眺めつ、東京にひかつた、東部には五時半に着した、始めての東京見物にて皆目を圓くして市中を歩いた時の氣持！宮城を拜し又楠公の銅像をも拜し櫻田門を通つたその時我等は當時に井伊直弼を思ひ起した電車に乗つた事もない僕の事であるから、電車に乗つても切符のさき方も知らないの滑稽でもあるが又心配でもあつた。上野公園前で下りて井筒や旅館に投宿した夕食がすむや、氣遣ひながら全部外出し十時には皆就床し明日は又全部で明治神宮農科大学、林業試験場等に行く豫定なり

思のよ、を 篋

ひらひらと散花片を掌にうけて我ひとりくむ春の心を。
明日は旅今宵は早く休らはんトランクもはや整ひにたり。
春の夜の情をしむる嫩草の山の彼方ゆ月ものほれり。
萌ゆるなる嫩草山に鹿走り集ふを見れば夕日あかるく
見渡せば涼風渡る衣笠のみどりのびにし松

の並木を。
春風は若葉の上をくすぐるか淡き憂を受くる若人。
一じきり思にふけるそのきはをまほろし浮きてレクチュア續く。
麗なる水田にうつす重き山楡林のひたに續くも。
蓮の葉の一つ二つは浮き出でぬ其和肌に觸れても見たき。
濃かに木曾川堤若葉せり新なる岸へ新なる日の。

木崎湖晚春 白峯

西方遙かに走れる日本アルプス。白壁々たる雄々しさ……偉大さよ。名に負ふ木崎湖を瞻望して雄姿を現はす。大小旗亭点々と……今や櫻花の眞盛り、紅桃之れと粹を競ひ之を覆ふ。湖上湖邊釣舟釣人或は浮び或は散列す。
駘蕩たる春光飄々たる春風一陣。櫻花は散りて胡蝶の如く、湖上の小舟に似たり陽氣六合に漲り、人心又醉然、自健車飛ばす人……歩いて行く人、長き短き釣竿無造作にかつぎ湖邊をさして行く人あり。小供は走る海老茶袴を纏へし洋傘軽げなるも興あり。破れたる短き服無遠慮に着こなしたる中學生。
舟上芝に先づ一休と釣人が功を競ふ無邪氣さ……オヤ何處でなく山鶯。摘林か。

嫩芽の落葉松林か。身の老も忘れて……
吾は獨りかこらぬ。彼はいふ。私は昔榮耀榮華せり。かくて歌へり。榮華とは榮え花と書くなれば……咲いて亂れて後は散るなり。
今は落ぶれぬ、そして老いぬ。早や世の中は厭はし。一層仙人の世渡をせんものど。
入りしは此處の山林なり。あまり邊の陽氣さ……ついに浮かれて歌ひでぬ。面白きは浮世なり、つらさも浮世なり、うかうかと浮かれけるよ。

盛岡蘇門會便り

盛岡市在住者より成る蘇門會は本年に至り急に盛大と相成り目下關係者九名有之候大正十年度第一回は伊藤門次先生の朝鮮總督府より高農林學部教授として御來任を歓迎の意味にて去る五月二十日開催致しナカノリサンに木曾氣分を味ひ且懷舊談やら或は木曾時代の茶目の思ひ出に夜の更くるを知らざる有様に候ひき
因に同窓會員の氏名は左の如くにして蘇門會開催に當りては岩手縣下在住の各位に御出席方御通知せる處花卷小林區署在住の小松義三君が遠路殊に多忙なる時にもか、はら御出席せられし事を特に感謝し尙同窓會の會合には斯る篤志家のより多からんことを切望致し候
當日出席會員諸氏

- 盛岡高等農林學校
- 伊藤門次 (林學部教授)
 - 宮澤 功 (二二回林學科)
 - 山本 茂 (二六回林學科)
 - 西村清志 (二七回林學科)
 - 西牧 功 (二八回林學科)
 - 小池政人 (二七回農苑科)
 - 岩手縣廳
 - 竹腰福雄 (二五回舊姓池口)
 - 佐藤誠一 (二六回)
 - 直井利雄 (二七回病缺)
 - 花卷小林區署
 - 小松義三 (二六回)

二仲 同窓生各位より盛岡高等農林學校入學手續及規則書等御照會の向多數有之候間明年は益々盛大に可相成と信し居候
蘇門會 第二信
六月十日島内庸明先生は秋田縣立農林學校生徒を引率せられ見學旅行に來盛せられたるを以て臨時蘇門會を當市第一流の西洋料理店秀清軒に相催し候
先生は足掛十年木曾に在職せられたるを以つて同窓の馴染深く例によつて杭ヶ原當時の茶目に花を咲かせ大いに喰ひ大いに飲み大いに唄ひ最後には大廣間に陣陣を作りナカノリサンを踊り愉快の一夜を過し候
木曾踊は何れも伊東町長の免許皆傳と言ふ猛者連のみにて寄宿を脱欄して練習した當時が懐かしく相成り候
幾何や經理、測量で油を搾られた先生の

會員諸君に謹告

教室觀は先入主として誰い人どのみ思ひ居り候へ共當夜の木曾踊の音頭の取り方より推察せば仲々隅におけぬ男に御座候。以上諒知被下度候
大正十年四月三十日 校友會

島内先生謝恩金領收報告

- 金五圓 安藤 清吉殿
- 金參圓 中越 三郎殿
- 金壹圓五拾錢 山本 茂殿
- 金壹圓 家高 甚一殿
- 金貳圓 家高 碩二殿
- 金貳圓 丹澤 潔殿
- 金四圓 大島 晃殿
- 金參圓 下平 三雄殿
- 金參圓 内田新之助殿
- 金五圓 小原 靜雄殿
- 金五圓 平田 美則殿
- 金壹圓 白木 老雄殿
- 金壹圓 野口 勇殿
- 金壹圓 吉田 正男殿
- 金壹圓 小池 常三殿
- 金壹圓 日野 櫻亮殿
- 金壹圓 米倉 巧殿
- 金參圓 細窪友一郎殿

謝恩金領收報告

- 島内先生 (締切後來りしもの)
- 金拾圓也 深澤 佐愛殿
 - 金貳圓也 長田 克巳殿
 - 金貳圓也 橋爪 滋殿
 - 金貳圓也 松尾 廣次殿
 - 金貳圓也 大坪 時治殿
 - 金貳圓也 佐塚 甲子殿
 - 金貳圓也 安井 元吉殿
 - 金貳圓也 吉川 眞夫殿
 - 金貳圓也 渡邊 知則殿
 - 金貳圓也 荻原 惠治殿
 - 金貳圓也 中村 五郎殿
 - 金貳圓五拾錢也 岩井 洋治殿
 - 金貳圓五拾錢也 山中三十四殿
 - 金貳圓五拾錢也 村上 道信殿
- 合計金參拾五圓也
累計金壹百參拾八圓六拾錢也
- 長野縣木曾山林學校
創立記念會記念事業
醸金申込報告書 (第四回報告申込順)
- 金八圓 原川 只一殿
 - 金七圓 竹内房太郎殿

友 林 蘇 岐

金拾圓	原喜 四三殿	金拾圓	原 恒殿
金五圓	加藤 七藏殿	金拾圓	白木 老雄殿
金六圓	佐塚 甲子殿	金拾圓	一之瀬 繁雄殿
金拾圓	田中 泰吉殿	金拾圓	古根 是殿
金貳拾圓	小松 義三殿	金五圓	梅村 計介殿
金貳拾圓	坪倉 藤三郎殿	金七圓	征矢 三郎殿
金五圓	尾重 清殿	金參圓五拾錢	野口 勇殿
金拾圓	吉田 武男殿	金拾圓	矢島 種殿
金拾圓	小羽 根安治殿	金拾圓	佐竹 兵治殿
金拾圓	山村 次一殿	金五圓	吉田 正男殿
金拾圓	前野 慶一殿	金五圓	三原 忠一殿
金五圓	小田 寶殿	金拾圓	三原 英一殿
金貳拾圓	田近 善右衛門殿	金拾圓	林 與五郎殿
金五圓	日野 櫻亮殿	金拾圓	岡戸 廣治殿
金拾圓	原 七郎殿	金拾圓	西野 入 勳殿
金拾圓	森戸 吾良殿	金四圓	峰村 歲末殿
金七圓	丸山 林一殿	金七圓	米倉 巧殿
金七圓	代田 文之助殿	金拾圓	北村 竹治郎殿
金拾圓	小原 靜雄殿	金貳拾圓	吉田 兵吉殿
金七圓	宮崎 惠喜多殿	金五圓	伊藤 厚殿
金拾圓	木下 稗藏殿	金拾圓	嶽野 利雄殿
金五圓	吉田 良惠殿	金五圓	田澤 秋藏殿
金五圓	塚田 繁太郎殿	金拾圓	松本 清太殿
金五圓	中越 三郎殿	金五圓	喜多村 弘殿
金八圓	征矢 野餘所夫殿	金五圓	久保 照人殿
金五圓	宮下 武夫殿	金拾圓	小林 桂一郎殿
金拾圓	森 巖殿	金拾圓	木下 武夫殿
金五圓	石坂 季治殿	金貳拾圓	小松 精内殿
金八圓	仲侯 伍市殿	金拾圓	山下 常記殿
金五圓	和田 守衛殿	金拾圓	木村 鐵次郎殿

金五圓	今井 真二殿
金拾五圓	松館 藤太郎殿
金八圓	米山 芳郎殿
金五圓	恩田 司馬之助殿
金拾圓	島田 雄太郎殿
金五圓	市岡 正茂殿
金拾圓	岡戸 郁二殿
金七圓	倉科 浦一殿
金五圓	池田 仲治殿
金壹百圓	〔大正十年三月卒業〕 村松 一郎外三十九名
分合計金七百貳拾八圓五拾錢也	
累計金貳千五百七拾圓也	
長野縣木曾山林學校 創立記念事業 醴金申 込報告書	
(第五回報告申込順)	
加藤 清一殿	
古根 勳殿	
佐藤 恒殿	
百瀬 三一殿	
塚田 大殿	
丸山 嘉一郎殿	
東原 智殿	
近藤 幸吉殿	
鈴木 正雄殿	
坂本 光太郎殿	
加藤 朝太郎殿	
矢島 武六殿	
平田 美則殿	

友 林 蘇 岐

金拾圓	鶴岡 政義郎殿	金拾圓	秋田 蘇門會
金六圓	德武 國久殿	金參拾圓	蘇卷 壽一殿
金五圓	遠山 虎雄殿	金六圓	高村 純平殿
金參圓	木村 榮一殿	金貳拾圓	倉澤 真殿
金拾圓	矢島 駒二殿	金五圓	瀨在 實殿
金拾圓	武久 貞一殿	金九圓	長谷部 久雄殿
金拾圓	水野 宏殿	金七圓	大坪 時治殿
金拾圓	中野 楊殿		千村 吉雄殿
金拾圓	松澤 萬吉殿		高野 金作殿
金六圓	伊藤 嘉代殿		小林 哲三殿
金五圓	福澤 定雄殿		山村 克人殿
金貳拾圓	加藤 純一殿		田中 榮一殿
金五圓	有賀 正一殿		原 潔殿
金拾圓	今井 武雄殿		小若井 茂樹殿
	前田 正義殿		近森 良材殿
	深澤 佐愛殿		月田 喜代佐殿
	榑川 金次殿		八木 愿藏殿
	丹澤 潔殿		志津 幸祐殿
	多田 慶次郎殿		本多 清石工門殿
	成瀬 義郎殿		神作 四郎殿
	市岡 新八殿		川岸 滋次郎殿
	長田 克巳殿		松澤 莊次郎殿
	橋瓜 依一殿		星 武男殿
	小林 正基殿		金井 澄水殿
	佐藤 光造殿		水上 壯三殿
	辻 敬二殿		岡田 恒治殿
	小瀧 昇太郎殿		肥後 金四郎殿
	服部 啓次郎殿		
	坂田 勘太郎殿		
	安井 元吉殿		

金拾圓	藤卷 壽一殿
金參拾圓	高村 純平殿
金六圓	倉澤 真殿
金五圓	瀨在 實殿
金九圓	長谷部 久雄殿
金七圓	大坪 時治殿
	千村 吉雄殿
	高野 金作殿
	小林 哲三殿
	山村 克人殿
	田中 榮一殿
	原 潔殿
	小若井 茂樹殿
	近森 良材殿
	月田 喜代佐殿
	八木 愿藏殿
	志津 幸祐殿
	本多 清石工門殿
	神作 四郎殿
	川岸 滋次郎殿
	松澤 莊次郎殿
	星 武男殿
	金井 澄水殿
	水上 壯三殿
	岡田 恒治殿
	肥後 金四郎殿

謹告。五月號に廣告致せし通り未だ御申込なき御方は至急御申込み相成度候也

校友會便り

校友會各部顧問左記の如く各先生に委囑せられたり

庶務部 三溝、勝野
 雜誌部 田中、吉川、倉尾
 辯論部 中村、西澤
 擊劍部 西澤、荒木
 柔道部 菊池、小貫
 庭球部 塚越、吉川
 弓術部 安藤、藏尾
 運動部 菊池、小貫

昨年来より同好者間にて種々論議せられたり、ありし野球道具購入の件も漸く具體化されて遠からずバットの響きに抗の原の空氣も震はさる、ことなるべく又オリンピック競技用の運動具も追々購入せられ運動場はいよいよ賑ひを呈し生徒一同元氣益々旺盛にして此の分ならば晴の舞臺に登場の議も實現する事となるべし

**大正九年度校友會
收支決算報告**

○收入之部
 一金九百〇七圓貳拾錢 收入總額
 内 譯
 金七百七拾四圓也 在校生會費
 金五拾參圓貳拾錢也 職員會費

金八拾圓也

卒業生雜誌代

○支出之部

一金八百七拾八圓六拾貳錢

支出總額

內 譯

金八拾參圓拾錢

庶務部

金貳百九拾壹圓九拾七錢

雜誌部

金九拾貳圓五拾錢

辯論部

金五拾圓五拾錢

擊劍部

金五拾五圓

柔道部

金八拾五圓

庭球部

金五拾壹圓拾七錢

弓術部

金九拾八圓九拾參錢

遠足部

金拾六圓拾錢

運動會

金五拾四圓參拾五錢

創立記念會

差引殘金貳拾八圓五拾錢

記念號發刊費

○備 考

一、本年度より校友会會費一人一ヶ月金四拾錢とす

一、殘額金貳拾八圓五拾八錢也は雜誌部

貳拾週年記念號發刊費用の一部とす

一、創造記念會支出金額は縣下中等學校

聯合マツチ出場費を充用せり

右大正十年六月三日報告

大正十年度校友會豫算會報

記 事

五月十八日午後會長の都合其の他により四

大正十年六月廿三日印刷
大正十年六月廿五日發行

長野縣西筑摩郡福島町四〇四番地 正
編輯兼發行人 安井 澤
長野縣西筑摩郡福島町三八九番地 書
發行所 蘆 澤

夫 夫
長野縣松本市小柳町八十五番地 川 吉
長野縣松本市小柳町八十五番地 川 版
印刷所 淺 川 活 所

【定價金參錢】

月より運送を重ねし校友会豫算編成に付役員會開催會屆始め各部顧問參席の上本年度校友会諸事業に對する會長の方針並に各部豫算の標準に付説明あり散會
五月二十一日午後各部部長集有會長の方針及標準に大體準據して各部腹案を定め散會
五月二十七日午後會長顧問部長參集各部共其腹案を述べ言論戦後決議して散會
六月三日午後總會開會豫算案編成經過報告各部内容説明萬場異議なし依て原案通り可決す其收入及支出次の如し

○收入之部

一金壹千五拾四圓四拾錢

總收入

內 譯

金九百拾貳圓也

在校生會費

金六拾貳圓四拾錢也

職員會費

金八拾圓也

卒業生雜誌代

○支出之部

一金壹千五拾四圓四拾錢也

內 譯

金九拾五圓也

庶務部

金參百六拾圓也

雜誌部

金壹百拾圓也

辯論部

金百圓也

庭球部

金九拾圓也

擊劍部

金九拾圓也

柔道部

金五拾五圓也

弓術部

金拾圓也

遠足部

金參拾圓

運動器具購入費

金六拾圓也

縣下中等學校聯合マツチ出場費

金五拾四圓四拾錢

秋季陸上運動會費

外金五拾圓也

前年運動會費殘金

尙金四拾圓

各人より徵收運動會費に充つ

會員動靜

以上

○細窪友一郎君 北海道空知郡富良野町帝林局出張所に轉任せらる

○羽田龍尾君 東京府廳内木炭協會に轉勤

○白木老雄君 福島縣原市小林區署に轉勤

○中村治郎君 郷里西筑摩郡上松居住

○丸山林一君 全上

○瀧在 實君 長野縣下高井郡役所に轉任

○兒野 榮君 鳥取縣廳林務課に轉任

○川岸翠次郎君 北海道廳林務課に轉勤

○征矢朴郎君 臺灣臺中州大屯郡大平庄頭

泮坑大寶農林部に轉職

○日野櫻亮君 北海道廳に轉任

○市岡淳一郎君 帝林局木曾奈川村分擔區に轉勤